

# 地域とともにある教員の育成を目指す 地域未来教育カリキュラム開発の試み

— 久万高原町黒板アート制作活動を通して —

小田 哲志<sup>1)</sup>, 高橋 平徳<sup>1, 2)</sup>

1) 愛媛大学次世代人材育成拠点地域未来教育部門

2) 愛媛大学次世代人材育成拠点教職総合センター

## Developing a Community-Based Future Education Curriculum for Fostering Community-Oriented Teachers: Insights from Blackboard Art Projects in Kumakogen Town

Tetsushi ODA<sup>1)</sup>, Yoshinori TAKAHASHI<sup>1, 2)</sup>

1) Division of Education for Future of the Region, Education Hub for Human-resource Development of Next Generation,  
Ehime University

2) Center for Teacher Education, Education Hub for Human-resource Development of Next Generation,  
Ehime University

### 1. はじめに

学校の入学式や卒業式で、在校生や教職員が黒板に描くイラストやメッセージは、長年にわたり教育現場の伝統的な風景となっている。近年、これらの表現は進化し、チョークだけで描かれたとは思えない素晴らしい黒板アートがテレビやインターネット等で紹介されている。

例えば、善通寺市・善通寺市観光協会の「まちなか黒板アート」(2022)や「木更津駅アートジャック」(2022)など黒板アートの地域活性化を目的とした活動や、川崎市の小学校における黒板アートを活用した児童の創造性や主体性を引き出す総合的な学習の時間での授業実践が報告されている(竹内他, 2020)。

また研究としては、三澤(2015)が、登校前の教室の黒板いっぱいに美術大学学生がアート作品を描き、始業前に消してしまう「黒板ジャック」により、鑑賞する児童生徒の脳を活性化し学習へのスイッチを入れる効果があったと報告している。大学生・大学院生の教育を目的とした研究では、荒木(2019)によって大学院生の制作記録がまとめられている。

このように、「黒板アート」という活動は盛んに行われ注目が集まっているが、鑑賞した児童生徒や、制作した学生らにどのような効果をもたらすかといった教育的意義について検討した研究は少ない。

ところで、筆者が所属する愛媛大学次世代人材育成拠点は、STEAM教育を基盤とした地域教育の創生、並びに次世代を担う人材の発掘・育成を目指している(愛媛大学次世代人材育成拠点, 2025)。こうした事業の一環として、黒板アートの教育的意義に注目し、愛媛大学教育学部美術教育専攻の学生を中心に、久万高原町立小中学校で黒板アートを制作し、9月の始業式に登校した児童・生徒にサプライズで公開するという事業を展開した。

本研究では、この事業を、黒板アートを活用した、地域と連携した教員の育成を目指す地域未来教育カリキュラムの開発として位置付け、活動を報告するとともに、児童生徒及び制作した大学生・大学院生へのアンケートから成果を検討することで、地域未来教育カリキュラムとしての可能性を考察する。

地域未来教育カリキュラムとは、愛媛大学教育学部と次世代人材育成拠点地域未来教育部門が連携・協働し開発し

ているカリキュラムの総称である。地域創生教育をキーワードに、教員を目指す全学部の学生が、「愛媛県内の少子化が進む地域や学校に出向き、子どもたちと関わりながら、課題解決プロジェクトや体験的な実習を系統的に行える「地域創生カリキュラム概論」「地域未来教育演習」を提供し（愛媛大学、2024）、「少子化・小規模校化が進む地域において、地域を愛し、地域と共に豊かな学びを創り出せる、子どもたちのロールモデルとしての教師」の育成を目指している（愛媛大学教育学部、2025）。

「地域未来教育演習」では、松山市興居島での空き教室デザインや商品開発という廃校での実践的で体験的な学びを通して、学校が地域の人を繋ぎ、過去の思い出を現代、未来へとつなぐ意味について考えていく廃校活用・SDGsや（愛媛大学教育学部、2025）、地域の人びとと連携し、地域の自然や文化資源を活用した体験活動を子どもたちに提供していく資質能力を身につけることを目指した演習が提供されているが（高橋他、2023）、本研究での久万高原町黒板アート制作活動もこうしたカリキュラムの一環として位置づけられるものである。

## 2. 黒板アート事業の内容

### 2.1 事業実施への準備

黒板アート事業実施校の選定の経緯は以下の通りである。2024年4月に、小田が久万高原町教育委員会、校長会、協力事業所経営者へ事業計画の説明を行った。その後久万高原町公立小中学校校長会において、校長会長から趣旨、概要等を説明して希望校を募り、5月に中学校1校、小学校3校の計4校を決定した。それぞれの学校は、中学校1校生徒数22名、小学校3校児童数計49名（19名、20名、10名）の中山間地に所在する小規模校である。

そして、実施校に対して制作黒板数、夏季休業中における制作可能日等の調査を行い、各学校との話合いで、8月下旬を中心に、合計16黒板を描くことを決定した。

黒板アートを制作する学生・大学院の募集は、まずボランティア募集チラシを作成し掲示した。また、愛媛大学教育学部の美術教育専攻の教員に協力を得て、1、2回生に説明会を実施し、美術教員志望学生3名、美術科教員免許状取得を目指す教育学部学生・教職大学院生各1名（この2名は1黒板を共同制作）、合計5名の参加希望を得た。次に、美術系専門学校、デザイン科・美術部を有する高等学校、地元高等学校の教頭に趣旨、概要等を説明し参加者募集の協力を要請した。その結果、愛媛大学他学部学生1名、他美術大学学生・院生各1名、そして高校生1名の応募があった。他に社会人5名（プロ・アマ画家4名、絵画愛好家1名）の参加が決定された。

今回参加した学生・大学院生はこれまでにほとんど黒板アート制作の経験体験がない。そこで、本事業に参加

する日本画家伊東正次氏（一般社団法人ART JAPAN和 SOCIETY）ら画家、地元の絵画愛好家等の指導や支援を受けながら作品制作を行うことで、学生は技術的な面だけでなく、制作過程で生じる不安や迷いといった精神的な側面においてもサポートを得ることを目指した。

### 2.2 参加大学生・大学院生への事前指導

参加大学生・大学院生には、オリエンテーションを開き、説明会やボランティア募集チラシで示した、①自分の描いた黒板アートで子どもたちの2学期からの学校生活を励ます、②黒板アートづくりを通して、自分自身のこれからの生活や進路に対して意欲を高める、という2つの目的を改めて案内した。

作品テーマを検討する際には、目的①の9月2日の始業式に登校した児童・生徒の2学期からの学校生活を励ますものということはもちろん、児童・生徒に身近な地域の題材や、STEAM（科学、技術、工学、芸術、数学）を作品テーマに取り入れ、分野横断的な学びの場ともなるよう依頼した。

また、作品をブラッシュアップするために、8月10日までの下絵の提出を求めた。

他に、体調管理、熱中症対策、服装、準備物、進捗状況の報告（LINEグループへの連絡）、個人情報保護（児童生徒の個人情報に当たるものの撮影禁止）、緊急時の対応等を伝達し指導した。

オリエンテーションに参加できない大学生・大学院生にはメールで連絡し指導を行った。

### 2.3 作品制作の過程

2024年8月26日から30日の制作期間中、小田、伊東氏が各校を巡回し、適宜、励ましや称揚、伊東氏による技術指導を行った。なお、事業当日に天候、体調不良等の理由により2名（大学院生1名、画家1名）が欠席したため、予定していた16黒板から2黒板の制作を断念し、大学生6名、大学院生1名、高校生1名、社会人4名の計12名で計14黒板を制作した。

制作時間は、伊東氏は1黒板の制作に2時間程度、他の画家・社会人は1日（1日6時間程度）から2日、大学生・大学院生は2～3日要した。






以下表1は、ある学生が行った制作過程である。他の大学生・大学院生も類似した作業工程で作品を完成させた。完成させた作品の一覧は、以下の表2の通りである。

表1 ある大学生の作品制作過程

順番	1 (1日目)	2 (1日目)
作業	黒板を分割, モチーフの配置決定	ラフ画の転写
説明	1枚を8分割しパーツの配置を決める。	イラストアプリに入れていたラフ画を投影し転写する。
写真		
順番	3 (1日目)	4 (1日目)
作業	主なモチーフの描写	背景等詳細部分の描写
説明	モチーフとなるカブトムシ, 少年, トンボを大まかに描く。	背景や少年の顔や虫取り網等, 詳しく加える。
写真		
順番	5 (2~3日目)	6 (3日目)
作業	作品の仕上げ	キャプションの掲示
説明	色の濃淡で陰影をつけて仕上げる。	完成した黒板アートに4つ切画用紙に, 作品名, 作家名, メッセージ等を添付する。
写真		「夏の思い出」 男の子の右手からカブトムシが飛び立つ様子を表現した。高校受験に向けて, このカブトムシのように, 元気よく羽ばたいてほしい (要約)。

表2 黒板アート作品一覧

<p style="text-align: center;">大 学 生</p> 	<p style="text-align: center;">大 学 生</p> 
<p style="text-align: center;">大 学 生</p> 	<p style="text-align: center;">大 学 生 ・ 大 学 院 生 共 作</p> 
<p style="text-align: center;">他 学 部 大 学 生</p> 	<p style="text-align: center;">他 美 術 大 学 学 生</p> 
<p style="text-align: center;">地 元 高 校 生</p> 	<p style="text-align: center;">社 会 人 絵 画 愛 好 家</p> 
<p>画 家</p>	
	

<p style="text-align: center;">画 家</p> 	<p style="text-align: center;">画家 伊東氏-1</p> 
<p style="text-align: center;">画家 伊東氏-2</p> 	<p style="text-align: center;">画家 伊東氏-3</p> 
<p style="text-align: center;">画家 伊東氏-4</p> 	

### 3. 児童生徒及び制作した大学生・大学院生へのアンケート調査から見る事業成果の検討

#### 3.1 アンケート調査の対象

アンケート調査の対象は以下の通りである。

- (1) 作品を鑑賞した小中学校の全校児童生徒71名（小学生49名，中学校22名）
- (2) 作品を制作した大学生・大学院生8名

#### 3.2 アンケート調査の手続き

黒板アートを見た児童生徒，および制作した大学生・大学院生に，黒板アート事業の成果を検討するアンケートであるという趣旨を説明後，アンケートへの協力は任意で，アンケートの内容は学会や論文等で報告するが，個人が特定される情報は秘匿する等倫理的配慮について説明し，協力を依頼した。

児童生徒に対しては，研究者から協力教員に8月30日にメールでアンケート調査用紙（児童生徒用）を送信し，作品を鑑賞した9月2日，または，3日の授業等で教員を通

して，対面で趣旨や倫理的配慮を説明後実施し回収していただくよう依頼した。

大学生・大学院生に対しては，研究者から8月30日にメールで，9月16日を期限としたアンケート調査用紙を送信し，メールでの返信を求めた。

小学生については3校計47名（1年4名，2年6名，3年11名，4年8名，5年11名，6年7名，回答率97.9%），中学生は1校17名（1年3名，2年9名，3年5名，回答率77.3%）の協力が得られた。制作した大学生・大学院生8名の内，6名の協力が得られた（回答率75.0%）。以上を分析の対象としている。

#### 3.3 児童生徒に対する成果

児童生徒を対象としたアンケート調査では，感想を想起しやすいよう以下3点の項目を示した。

鑑賞した児童生徒へのアンケート項目	
①	黒板の絵を見て思ったこと、感じたこと、気持ちなどを書いてください。
②	黒板の絵を見たことで、2学期からの学校や家での生活をどうしたいか、どう過ごしたいかについて思ったこと、感じたこと、考えたことがあれば、書いてください。
③	描いてくれた作家の方に、メッセージ、言いたいことがあれば書いてください。

分析にあたっては、記述内容が項目間をわたっているため、すべての項目を集約して分析した。アンケートの文脈に沿い要約してコード化し、コードを分類して類似するものをまとめ、サブカテゴリ、カテゴリを生成した。その結果、黒板アートへの反応、黒板アートへの賞賛、自身への影響という3つのカテゴリと、9のサブカテゴリ、40のコードが生成された(表3)。

表3 児童生徒を対象としたアンケートの分析結果

【カテゴリ】	(サブカテゴリ)	【コード】	感想シートの記述内容(一部を抜粋)		
黒板アートへの反応	驚きと感動	驚き	えを見たときは、「すごいなあ」や「えーっ」とおどろいた。すごい、きれいだと思いがかいたんだろうと思いました。絵が全部きれいでおどろきました。		
		感動	ものすごく感動しました。それぞれのイラストに思いがこめられており、心に残りました。		
	圧倒と脱帽	圧倒	こぼんの元気そうな絵をみて「すごいな」と思った。トリックアートももっといいなってすごい。どれも迫力があって上手だと思いました。		
		脱帽	今までも黒板に絵がかいてあることはありましたが、ここまでのクオリティの高い絵ははじめてでした。消すのがもったいないです。ほくはこんな絵を書けないと思いました。		
	作者への感謝と激励	家族に紹介したい	家に帰って学校のホームページで母たちに見せたいと思いました。		
		喜び	ほく達のために書いてくれてうれしい。わざわざこの学校に来てくださり、この絵をかいてくれたことを考えると、とてもうれしかったです。		
黒板アートへの賞賛	表現内容への賞賛	面白さ	はいすいこうからマダムがでてきたのがおもしろかったです。ソフトクリームの中からクジラが出ていたからおもしろかったです。お魚たちがみんなおどろいていいなと思いました。たこがたこやき、たいがいやき、いかがいやきとかいてはたをもっているのがおもしろいとおもいます。太陽の日光がいろんな色になっていて太陽のおおもかわい。[それぞれの個性]を見て、最初は人の絵だと思いました。だけど、紙にかいてあることは、花のおおに注目してみてねでした。よく見るとかおのまわりに花びらがありました。		
		多様さ	色々な色や形のものがあってすごい。わたしが好きなものもかいてうれしかったです。それぞれの絵1つ1つに個性があって面白かった。特に「ゆめ」という絵が好きでした。		
		精密さ	たこやきやたいやき、いかやきのねだんもかいてあってこまかいと思った。くじらのおふきの横にちやいのふねがあってびっくりしてるのがわかるようにかいてるのがこまかい。		
		正確さ	〇〇小のマークしっかりかけていると思いました。		
	表現技法への賞賛	写実的	なみのところがリアルですごいなと思いました。入道雲が本物みたいになっている。虫や人のリアルさがとてもすごかったです。3、4年の絵が、図かんみたいですごい。		
		立体的	ひまわりが立体的。花びらの曲がたうまい。		
		色塗り	細かくみると、重ね塗りがされていてすごいなと思いました。すみずみまで、ていねいにかけてぬれているとおもいました。		
		色使い	色の使い方がとても上手だなと思いました。色の使い方が工夫されており、すごい。クジラを水色や青やいろいろな色があっけりだと思った。		
		チョークによる表現	チョークの決められた色の中でこの壮大な絵を書いてすごいなと思いました。チョークでこんな絵がかけるとびっくりした。こぼんに絵をかくのはむずかしいのすごい。黒板消しとチョークだけでこんなにきれいに描けるの!と思いました。3つの色だけで楽しく見える。限られたチョークの色でひまわりと入道雲が書けるのがすごいです。		
		自身への影響	エンパワメント	元気がもえた	元気をもらえた。気持ちが軽やかになりました。カラフルだから、自分も心が楽しくなってきました。
				元気に活動したい	お魚たちにまけないようにいつも元気がつどうしたい。おさかなより毎日を元気にくらせるようにがんばります。絵にいたかぶとむしのように元気にすごしたいです。おさかなたちにまけないように、べん強をがんばって、遊んで元気いっぱい小学生になろうと思いました。太陽やクジラなどがおなので学校や家でほくも元気でいたいです。
			笑顔でがんばりたい	笑顔でがんばりたい	毎日、えがおでがんばります。これからはおさかなにまけないようにどりにりよしてがんばります。ほくは、くじらの笑顔にまけないように勉強をがんばりたいと思いました。
がんばる気持ちが湧いた	えをみてがんばりがあふれ出しました。このえをかけたときにかいた人のメッセージを思い出してがんばりたい。これからはおさかなにまけないようにどりにりよしてがんばります。				
学校生活への意欲の向上	挑戦への意欲	挑戦への意欲	これからいろいろなことをがんばっていきたいです。きれいなアートに背中をおされたように思います。つねに上を見て歩きたいです。色んなことにチャレンジしてがんばりたい。作者同様がんばりたい		
		これをかいた人ががんばりたいにわたしもいっしょけんめいべんきょうをしたりしゅくだいをしたりしたいと思います。			
	2学期に向けて	2学期に向けて	2がっきのゆきがでたよ。2学期をがんばろうと思いました。2がっきからがんばります。私は、2学期またがんばれそうだなと思いました。2学期も元気ががんばります。大きなまわりを見て2学期もやる気ができました。おかげで今学期もがんばろうと思えました。2学期からいろいろなことにチャレンジしてがんばりたいと思いました。		
		学習意欲	かんじやテストべんきょうを自学をしてがんばります。2学期は気持ちをきりかえてしんげんに勉強に取り組みたいと思いました。これからはたくさん勉強や部活にはげみます。		
		学校行事	うんどうかいのいちりんしゃをがんばりたいです。2学期にうんどう会や国ごやさんすうをがんばりたいなと思いました。たくさん思い出を作りたいなと思いました。		
		清掃活動	黒板をきれいに消したいです。		
	知識・技能・態度の変化	知識の獲得	知識の獲得	3~4年の植物がたくさんあるからいろいろの花や野菜とかの名前がわかれてうれしかったです。わたしは、アサガオがむしとさざれによくくと知ってすごいなと思いました。いろいろな花が書いてあって知らない花もあって花がいろいろな業になるのが分かってすごいなと思いました。えひめにこんな花があるんだな~と思いました。	
			技法の獲得	ひまわりはむらさき、人にはりんかくなどに黄色、鼻などのハイライトにはピンクを使っている、芸術的だと感じました。自分のえにこまかいところもつけたたいです。	
視点の拡大		視点の拡大	今までみていた景色をちょっとちがう見方でみてみようと思った。黒板を、アートとして用いることができたように、人や物の境界を決めて、様々な見方を活用していきたい。		
		探究意欲の向上	ほくは、黒板にかかれた絵の花を全部見つけたたいです。絵にかかっている花を全部見つけたたいです。かいてくれた花を家でさがしてみたい。		
創作意欲の向上		創作意欲の向上	おうちでもいっばいえをかきたい。じょうずなえをおおきいようしてかきたいです。もっと、楽しくなるような絵を自分でもかいてみたい。		
		美術学習への意欲向上	美術をさらに頑張りたいです。美術の授業等で色の使い方について、進んで学びたい。えをじょうずにかくほうをおしえてください。色ぬりががなで教えてください。		
芸術への興味喚起	芸術への興味喚起	もっと絵が好きになった。今後、更に芸術への興味を持ち、ふれていきます。少しは絵にさきょうみを持つとうと思えました。「黒板アート」とかがどこかであつたら行ってみたい。			
	作者への興味喚起	どうして黒板アートを書いているのか。なぜこの絵を書こうと思ったんですか?。			
黒板アートへの挑戦意欲	私もこぼんアートをやってみてみたい。黒板アートやってみたい。私もこぼんアートで人々の心を動かしてみたいです。ほくも黒板にでっかい絵をかきたいです。				

作品メッセージの伝播	それぞれの個性を大切にしたい みんなの個性を大切にしたい	この絵とおりに個性は人それぞれあるからその自分たちの個性をたいせつにしようとおもいました。「それぞれの個性」を見て自分の個性を大切にしたいです。私たちの学級目標にも「十人十色」という言葉が使われているのでそれぞれの個性を生かせるようにしたいです。
個性を見つけて活かしたい	自分の個性をもっと知りたいと思った。自分のこせいを生かそうと思いました。みんなのすばらしい個性を見つけて、いいところかを探したいです。	
友達と仲良くしたい	お魚たちがみんなえがおでいいなと思いました。友だちと仲よくしたい。より仲をふかめたいです。2学期からはケンカがないようにしたいです。友達となかよくしたいです。	
夢や考え、目標をもって努力したい	「ゆめ」を見て、日ごろからゆめを持ってすごしたいです。自分の夢や目標に向かってがんばります。1、2年の絵を見て、自分の考えをちゃんともうと思いました。自分のやりたいことは、ちゃんとやらないと「そん」なんじゃないかと思いました。すすんでとりよをしたいです。	

以下では生成されたカテゴリ等について述べていく。文中ではカテゴリを【】、サブカテゴリを〈〉、コードを〔〕、アンケートへの記述内容を「」で表し、代表的なものを示していく。

### 3.3.1 黒板アートへの反応

まずは【黒板アートへの反応】を見ていく。「えを見たときは、「すごいなあ」や「えーっ」とおどろいた」「すごい、きれいと思いだれがかいたんだらうと思いました」「ものすごく感動しました」「それぞれのイラストに思いがこめられており、心に残りました」といった〈驚きと感動〉が述べられていた。また、「こくばんの元気そうな絵をみて「すごいな」と思った。トリックアートもりったいになってすごい」「今までも黒板に絵がかいてあることはありましたが、ここまでのクオリティの高い絵ははじめてでした」「消すのがもったいないです」と〈圧倒と脱帽〉の反応も見られた。児童生徒は、クオリティの高い作品に驚き圧倒されたことが見て取れる。

そして、「家族に紹介したい」と思ったり、「わざわざこの学校に来てくださり、この絵をかいてくれたことを考えると、とてもうれしかったです」「元気いっぱいのお魚たちの絵をありがとうございます」「これからもたくさんの絵をかいてください。これからはおうえんしています」といったような、〈作者への感謝と激励〉の言葉もほとんどの児童生徒がアンケートに書いている。

教室という日常的な空間が黒板アートによって非日常化し感動を呼ぶ、作品に圧倒され作者に感謝を伝える、こうした児童生徒の感情の流れを生んだことのみでも黒板アート事業は大きな成果をもたらしたと言えるであろう。

### 3.3.2 黒板アートへの賞賛

次に【黒板アートへの賞賛】であるが、児童生徒は描かれた絵をじっくりと観察しているようで〈表現内容への賞賛〉と〈表現技法への賞賛〉と解釈できる記述がなされていた。

〈表現内容への賞賛〉として、「はいすいこうからマグマがでてきたのがおもしろかったです」「ソフトクリームの中からクジラが出ていたからおもしろかったです」という〔面白さ〕、「色々なきょうかのものがあってすごい」「それぞれの絵1つ1つに個性があって面白かった」という〔多様さ〕、「たこやきやたいやき、いかやきのねだんもかいてあってこまかいと思った」という〔精密さ〕、「〇小のマ-

クしっかりかけていると思いました」という〔正確さ〕などが挙げられる。児童生徒は多様なものが精密に正確に面白く書かれている黒板アートに賞賛を送っている。

〈表現技法への賞賛〉については、【黒板アートへの反応】での〈圧倒と脱帽〉につながるような黒板アートでの超絶な技法への賞賛が見て取れる。児童生徒は「なみのところがリアルですすごいなと思いました。」「入道雲が本物みたいになっている」「虫や人のリアルさがとてもすごかったです」「3、4年の絵が、図かんみたいですごい」という〔写実的〕な技法、〔立体的〕で丁寧な〔色塗り〕や、「クジラを水色や青じゃなくいろいろな色があってきれいだと思った」といった〔色使い〕を賞賛している。

そして何より、「チョークの決められた色の中でこの壮大な絵を書いてすごいなと思いました」「チョークでこんな絵がかけることにびっくりした。こくばんに絵をかくのはむずかしいのにすごい」「黒板消しとチョークだけでこんなにきれいに描けるの!?と思いました」「3つの色だけで楽しく見える」「限られたチョークの色でひまわりと入道雲が書けるのがすごいです」といった〔チョークによる表現〕への賞賛も多くあった。

やはり、黒板アートという、黒板やチョーク、黒板消しという身近なものから、超絶な表現技法によって生み出された作品を目の当たりにすることで児童生徒は大きなインパクトを受けるのであろう。そのことで引き込まれ、表現されている内容や技法に言及できるほど児童生徒が主体的にじっくりと作品を鑑賞できていることがうかがえる。黒板アートを通して、児童生徒は芸術に親しみ、じっくりと絵を鑑賞する機会を得ていると言えるであろう。

### 3.3.3 自身への影響

#### 3.3.3.1 エンパワメント

感動し圧倒されじっくりと絵を鑑賞することによって、児童生徒自身にも以下のように、さまざまな影響が生まれていることがうかがえる。この児童生徒【自身への影響】というものがもっとも黒板アート事業の成果と言えるかもしれない。

まずは、〈エンパワメント〉である。〔元気がもらえた〕〔元気に活動したい〕〔笑顔でがんばりたい〕〔がんばる気持ちが湧いた〕〔挑戦への意欲〕など、芸術が人の気持ちを励まし高めていることがよくわかる。「これをかいた人ががんばったみたいにわたしもいっしょうけんめいべんきょうをしたりしゅくぐいをしたりしたいと思います」という〔作

者のようにがんばりたい]という児童もいた。

### 3.3.3.2 学校生活への意欲の向上

次いで、〈学校生活への意欲の向上〉についての記述も多かった。確かに感想シートの項目②が「こくばんの絵を見たことで、2学期からの学校や家での生活をどうしたいか、どうすごしたいかについて思ったこと、感じたこと、考えたことがあれば、お書きください」という項目であるため記述する児童生徒が多くなったということもあるだろうが、「2がっきのゆうきがでたよ」「大きなひまわりを見て2学期もやる気ができました」「おかげで今学期もがんばろうと思えました」「2学期からもいろんなことにちょうせんしてがんばりたいと思いました」というように、確実に「2学期への意欲」が生まれていることがわかる。児童生徒の不登校や自殺が増える2学期初めの9月危機とよく言われるが、黒板アートはこうした危機の緩和にも効果をもたらす可能性があるかもしれない。

勉強や部活などの「学習意欲」や、運動会などの「学校行事」についての意欲も高まっていることがうかがえる。また「黒板をきれいに消したい」という「清掃活動」への意欲が増したという生徒もいた。これは黒板アートを通して黒板という道具が素晴らしいものであるという認識が得られたためであろう。

### 3.3.3.3 知識・技能・態度の変化

〈知識・技能・態度の変化〉への言及も多い。「いろいろな花が書いてあってしらない花もあって花がいろいろな葉になるのが分かってすごいなと思いました」「えひめにこんな花があるんだな～と思いました」といった「知識の獲得」, 「人にはりんかくなどに黄色、鼻などのハイライトにはピンクを使っていて、芸術的だと感じました」「自分のえにこまかいところもつけたしたいです」といった「技法の獲得」といったことをはじめとして、「今までみていた景色をちょっとちがう見方でみてみようと思った」「黒板を、アートとして用いることができたように、人や物の限界を決めず、様々な見方をして活用していきたい」という「視点の拡大」や「黒板にかかれた絵の花を全部見つけたいです」という「探究意欲の向上」も生んでいる。

芸術的な観点からも、「創作意欲の向上」「美術学習への意欲向上」「芸術への興味喚起」「作者への興味喚起」「黒板アートへの挑戦意欲」などを生んでおり、本物のアートを目の当たりにさせることの教育効果の大きさを認識できるものとなっている。

### 3.3.3.4 作品メッセージの伝播

そして最後に、〈作品メッセージの伝播〉が挙げられる。児童生徒はさまざまな黒板アートに込められたメッセージを読み取り、そうしようと思っていることがうかがえる。

たとえば、「この絵のとおり個性は人それぞれあるからその自分たちの個性をたいせつにしようとおもいました」「私たちの学級目標にも十人十色」という言葉が使われているのでそれぞれの個性を生かせるようにしたいです」「自分の個性をもっと知りたいと思った」「みんなのすばらしい個性を見つけて、いいところとかを探したいです」というような「それぞれの個性を大切にしたい」「個性を見つけて活かしたい」という気持ちを述べている。

また、「お魚たちがみんなえがおでいいなと思いました」「友だちと仲よくしたい」「より仲をふかめたいです」「2学期からはケンカがないようにしたいです」という「友達と仲良くしたい」という気持ち、そして、「ゆめ」を見て、日ごろからゆめを持ってすごしたいです」「自分の夢や目標に向かってがんばります」「1,2年の絵を見て、自分の考えをちゃんともとうと思いました」「自分のやりたいことは、ちゃんとやらないと「そん」なんじゃないかと思いました」「すすんでどりよくをしたいです」といったように、「夢や考え、目標をもって努力したい」という気持ちを生んでいる。このようにメッセージは十分に伝わっているだろう。

### 3.3.3.5 自身への影響まとめ

以上見てきたように、黒板アート制作活動は、児童生徒に〈エンパワメント〉〈学校生活への意欲の向上〉〈知識・技能・態度の変化〉〈作品メッセージの伝播〉という大きな影響を与えている。黒板アート制作活動は、児童生徒に非常に大きな成果をもたらしていると判断できるであろう。

## 3.4 制作した学生・大学院生に対する成果

続いて、制作した学生・大学院生のアンケートを分析し黒板アート事業の成果を検討する。学生・大学院生を対象としたアンケートでは、以下の8項目について記入を求めた。

作品制作した大学生・大学院生へのアンケート項目
①ご自身の黒板アート作品にどのような思いを込めて制作に取り組みましたか。
②黒板アート体験に参加して、どのようなことを感じたり思ったりしましたか。
③黒板アート体験に参加して、自己の成長・学びとなったことはどのような点ですか。
④制作過程での画家や学校の先生方との交流で自己の成長、学びとなったことはどのような点ですか。
⑤あなたが制作した黒板アートを見て喜んでる児童生徒の姿を見て、あるいはそんな児童生徒の存在が知っていることを知って、どのように思いますか。
⑥STEAM教育を意識した黒板絵を構想した感想をお書きください。
⑦あなたが地域の学校へ貢献したこと、また、することへのご意見、ご感想をお書きください。
⑧今後もこの活動をする場合、アイデアやご意見、ご感想をお聞かせください。

学生・大学院生を対象とした感想シートは対象が6名であるため、各項目に沿って記述内容を見ていく。以下では感想シートの代表的な記述内容を「」で抜粋している。特に重要だと考える内容は下線で示しながら、制作した学生・大学院生に対する成果を検討していく。

### 3.4.1 作品へ込めた想い

#### 3.4.1.1 明るく前向きな気持ちになるように

「ご自身の黒板アート作品にどのような思いを込めて制作に取り組みましたか」という質問項目に対し、「子どもたちが私の作品を見て喜んだり笑顔になったりできるように、という思いを込めて作品を描き上げた」「子どもたちが作品を見てワクワクした気分になれるような作品にしたいと思いました」「子どもたちの笑顔が見たい。見る人みんなが力を受けてほしい。先生方にも楽しませてもらえたら」と述べられていた。

また、「私は小学生の頃、長期間の休みが続き、新学期は憂鬱な気持ちで登校していたことを覚えている。生徒たちが、少しでも学校に来てよかったと思える黒板アートを目指し制作活動に励んだ」「夏休み明けの子どもたちに2学期はじめの一日からわくわく、ドキドキのような気持ちを味わってもらい、今後の学校生活を少しでも楽しみだと思えるようになって欲しい」と思いを込めて取り組みました」「子どもたちは夏休み明けの登校となるため、それぞれの夏休みの思い出を振り返りながら、描かれた少年のようにウキウキとした気持ちで新学期を迎えてほしい」とも述べられていた。

児童生徒での【自身への影響】で〈エンパワメント〉〈学校生活への意欲の向上〉が見られたが、作者の、子どもたちが笑顔になったりワクワクしたり力を受けて欲しいという思いや、新学期の憂鬱さを無くしたり、今後の学校生活を少しでも楽しみだと思えるようにとの思いは十分に伝

わっている。

また、「先生方にも楽しませてもらった」との記述もあった。今回は教員や学校関係者への調査は行っていないが、今後の改善点である。

#### 3.4.1.2 描く内容や技法、メッセージについて

描く内容や技法については、「夏休みが終わって、学校にやってくる生徒たちが、明るく前向きな気持ちになれるようにたくさんの色を使って画面を構成しました」「できるだけ子どもたちが惹かれるようなテーマを選び、子どもたちの目線でも一目みて理解しやすいような構図になるよう試行錯誤した」「今回貸していただいた色とりどりのチョークをフル活用し、黒板と画材を生かした美術作品を作り上げることを意識した。単調な色にならないよう色を重ねたり、黒板の深緑色にチョークの色がきれいに乗るよう長い時間をかけて描き上げたりした」とあるように、明るく前向きな気持ちを生むようたくさんの色を使うことや、児童生徒を惹きつけるテーマを一目見て理解しやすい構図で描くこと、黒板とチョークという画材を最大限活かすことを心がけていることがうかがえる。これらの作者の意識も、児童生徒からの【黒板アートへの賞賛】からわかるように、十分に伝わっている。

とくに、「何かに挑戦する、新しいことをはじめる、そんな時にこの作品を思い出して一歩前に踏み出せるような、そういう力を与えられる作品になればいいなと思っています」「子どもたちが、各自の個性を大切にしてこれからも生きてほしい」という作者のメッセージについては、児童生徒の〈作品メッセージの伝播〉からも確認できるように十二分に伝わっていると言えるであろう。

#### 3.4.2 参加への感想

「黒板アート体験に参加して、どのようなことを感じたり思ったりしましたか」という質問項目に対して、「黒板という身近なものを通して非日常をお届けできる素敵な企画だと思った」という黒板アート事業への肯定的評価があった。

また、「絵を描くことができる能力一つで人を楽しませることができることに喜びを感じた」、「今まで自分の創作活動はほとんどが自己完結していて、誰かを想いながら創作することはほぼありませんでした。今回この企画に参加させていただき、誰かのために作品をつくることの充実感を強く感じることができました。誰にどう思ってもらいたいのか、これが念頭にあるだけでラフスケッチから完成まで、脳内がずっとそのことでいっぱいになって、完成したら今度はどんな風に受け取ってくれたらいいかとそわそわする。こんなにわくわくする制作ははじめてで、とても貴重な体験をさせていただきました」といったような絵を描く楽しみや充実感、制作者としての肯定感の向上、貴重な体験であっ

たことなどが述べられている。

このように黒板アート事業は肯定的評価で受け止められ、制作者である大学生・大学院生にとっても非常に充実した活動であったことがうかがえる。

### 3.4.3 自己の成長・学び

#### 3.4.3.1 表現者としての成長

3つ目の質問項目は、「黒板アート体験に参加して、自己の成長・学びとなったことはどのような点ですか」というものであるが、この質問項目も児童生徒【自身への影響】と同様に、黒板アート事業の成果として重要なものであるだろう。

まず制作した大学生・大学院生から述べられているのは、表現者としての成長と言えるものである。「これまで趣味や授業でやってきたような「自分のために描く作品」ではなく、「誰かのために描く作品」を制作できるようになったのは大きな成長だと思う」「子どもに分かりやすいアートを届けることは、自分が何を表現したいのか、何を残したいのかを考えるきっかけとなった」といったような、対象を考えた内容やテーマ設定の重要性の認識が述べられている。

また、「子どもという普段あまり触れ合わない年代に対して分かりやすい絵を心掛け、自分の表現に奥行きが生まれた」「大きな面積に書かせていただける機会はめったにないため、成功を通して技術面において自信につながった」「黒板アートを通して、絵の表現の工夫及び技術を学ぶことが出来ました」「今回の体験を通して、黒板とチョークという素材の可能性に気づくことができました。身近なものではあったもののこれを改めてキャンパスとして捉えようと、黒板は描き込んだ上から擦る、ほかす、重ねる、消す、といった様々な手段が使え、白と黒を反転させながら描くなど、まったく新しい制作ができる素材だということに気がついたのです。デジタル画材が増える今、黒板の懐かしさも斬新でアナログ的な制作に取り組むというのも面白いなと思いました。色や技術はまったくですが、黒板とチョークを使って一枚描き上げたことで確実に一段ステップアップできたと思います」とあるように、技術的成長への実感が述べられている。

美術教育を学んでいる大学生・大学院生にとって表現者としての成長を実感できる機会を提供することは非常に重要なことであろう。これが達成できている点においても黒板アート事業の成果は大きいと言えるであろう。

#### 3.4.3.2 教員になるものとしての成長

黒板アート事業が、制作した大学生・大学院生にもたらしているのは、表現者としての成長のみでなく、以下のように教員になる者としての学びももたらしている。教員としての学びとして、子ども理解の促進、教室掲示・学校掲

示の重要性の認識、小規模校・山間校の理解促進、防災教育的視点の芽生えが挙げられるであろう。

大学生・大学院生の記述には、「今回お世話になった小学校・幼稚園の先生方には子どもたちの喜ぶもの・ことを教えていただくことができ、作品をブラッシュアップする手掛かりになった」と子ども理解が促進されたことがうかがえる。

また、「制作とは関係のない話になるが、教室で活動をしていると先生や生徒が作った掲示物に目が入った。「新学期に頑張りたいことは？」という質問をLINEのメッセージ形式で答える形になっていて、現代の子どもたちに馴染みのある掲示になっていた。階段には誕生月の生徒の顔写真が飾られ、お祝いのメッセージが書かれていた。ひとりひとり大切にされていると感じた。自分が教師になった時には、作ったものを掲示するだけでなく、掲示物を思わず見てしまうような工夫を凝らし、温かみを感じられる教室を作りたいと思った」という教室掲示・学校掲示の重要性の認識が述べられている。

そして、「将来小学校教員を目指す身として、小規模校、山間地域の学校での生活を学ぶことができたのも良かったと思う」「小規模校の学校の立地や学校経営について考える機会になった。私は街の大規模校出身であったし、実習やアルバイトで行ったことのある学校も人数が多い小学校だったため、山奥の小さな学校を訪れるのは初めての経験だった。人数の多い地域・学校ではなかなか見られない人々の温かい関係性や、子どもたち一人ひとりが大切にされている様子を感じることができた」といった小規模校・山間校の理解促進も生んでいる。これらは現地に行ってその場にいながら活動することの重要性を示している。その場を目の当たりにすることの教育効果の高さを示唆するものであろう。

さらに、今回の活動でのイレギュラーなことであるかもしれないが、「今回は台風が接近している中でスケジュールだったこともあり、街から離れて交通の便もよくない場所で災害が起きたらどうするのだろう、孤立した場合子どもたちや地域の人たちはどう生活するのだろう、ということを考える機会にもなった」というような、防災教育的視点の芽生えも生んでいることがうかがえる。

### 3.4.4 画家や教員、他の学生との交流による成長

#### 3.4.4.1 制作への肯定的影響や刺激

「制作過程での画家や学校の先生方との交流で自己の成長、学びとなったことはどのような点ですか」という問いについては、「参加作家の間でも交流ができ、楽しく活動ができた」「躍動感をつけたかったが、モチーフの配置や技術が追い付かず、なかなか納得のいく形にならなかった。だが他の学生の作品を見ると、チョークのこすれた痕をうまく利用し臨場感を演出していた。画材と向き合い、うま

く利用すれば画力を超えた表現を培うことができることに気付いた。また一つ、チョークの表現方法を学ぶことができた」「小田先生や伊東先生には主に技術方面でのアドバイスをいただいた。自分一人で悩んでいた中多くの方々に助けていただくことで、たくさんの技術やアイデアを学ぶことができた。このようなことを学ばせていただけて感謝している」といったように、制作への肯定的な影響とともに、表現方法に大きな刺激を受けて学びとなっていることがわかる。

特に以下の言及は、まさしく画家、教員、他の学生との交流によって、肯定的な影響と刺激を受けたことによって産みの苦しみを乗り越え成長したことを示すものである。長文になるが以下引用する。

「アイデアを広げながら制作を進めていくことが多いため、大雑把にラフ画を作成し、自由に黒板に色を付けていった。途中は、絵がまとまらず思ったように描けないことに苛立ちを感じていた。また他のメンバーが順調に進んでいる様子や完成度を見て、劣等感や悔しさ、羨ましい気持ちもあり、一日教室で黒板と向き合う時間は孤独で辛い時間があった。だが、「もう少し制作をしたい」と黒板アート担当者に伝えた時には快く受け入れてくださり、送迎や差し入れなどサポートしていただいた。温かい言葉や助言をいただいたことで、自分なりのやり方で完成させていけばよいのだと励まされながら前向きに制作を進めることができた。描き続けることで目指していたものとマッチしていく感覚があり、胸を高鳴らせながら制作を終えることができた。私は、よく周りから影響を受け、自分と比べてしまうことがある。そのことをマイナスに捉えていたが、周りから刺激を受け、より自分の表現を追求する動機と、自分の表現を受け入れてくれる人たちの言葉と応援、そして期待があり、私は絵を描いているんだと気付いた。周りと比べて劣等感から孤独を感じるのではなく、そこに描くことの原動力があり、応援してくれる人たちがいることを想像し今後の制作活動に励んでいきたい。」

#### 3.4.4.2 表現者としての意識向上とキャリア設計への視点

プロの画家との交流が大学生・大学院生の表現者としての意識も向上させていることがうかがえる言及もあった。「制作中に伊東先生とお話しさせていただく機会があり、そこで「作品はプレゼントだ」というお話をさせていただきました。歴史に残る名画も、路地にあるらくがきも、作者がそれを見る人にメッセージを込めたプレゼントで、今私が描く黒板アートも例に漏れずプレゼントなのだ。すべてが自分の中で完結していた私にとって伊東先生のお話は衝撃的なものでした。今まで私が残してきた作品もいつか

は誰かに届くプレゼントなのかもしれないと思うと、創作に向ける熱意がより高まるような思いになりました」「先生方からの感想はいつも「子どもたちが喜びそう」だったことから、いつもどんな活動をするにも誰のための活動なのか目的を見失ってはいけないと感じた」というように、対象を考え、対象へのメッセージを意識した制作の重要性の認識といえるような、表現者としての意識の向上が述べられている。

また、「プロの日本画家の伊東先生からご教授いただいたことにより、自分の絵を見つめなおすきっかけとなった」「絵を描いているときに画家の伊東先生から自分が絵の中で心がけていることやこれまで学んだ絵の技術を活かして描いていることを褒めていただいてから絵に対する向上心が上がった」「休憩時間に画家の方とお話し、進路や生き方について多くのことを教えていただくことができた」といったように、表現者としての省察やモチベーションの向上、今後のキャリア設計につながる視点が得られていることがうかがえる。

#### 3.4.5 児童生徒の反応から

「あなたが制作した黒板アートを見て喜んでいる児童生徒の姿を見て、あるいはそんな児童生徒の存在を知ることを知って、どのように思いますか」という問いについては、以下の通り喜びや充実感が述べられている。黒板アート事業が、児童生徒とともに大学生・大学院生にとっても非常に充実し喜びが得られる事業であり、表現者としてのモチベーションを向上させたものであることがわかる。

「人のために描く絵がこんなにも楽しく、温かい気持ちになるんだと改めて思いました」「作品を素直に受け取ってもらえることってほんとうに有り難いことなんだなあと思いました。インターネットが普及し心無い言葉や邪推が飛び交うこの時代に、真っ直ぐメッセージを受け取って喜んでもらえるというのはとても貴重なことで、嬉しいことだと改めて思いました」「テレビで放映された子どもたちの様子を見て、自分の作品を肯定的に受け取ってもらえることにひとまず安心した。作品を見てストーリーを読み取ったり発想してくれているといいなと思う」「子どもたちの人生における素敵な思い出の中に黒板アートがあればこれ以上嬉しいことはない」「本当に心から嬉しかったです。自分の絵が児童たちの思い出の一部になったと思うと感慨深いです」「自分たちが制作した作品の前で喜んでくれている先生方や子どもたちの様子を見て、達成感や充実感を感じるようになりました」「自分の絵を通してこれからも喜びを提供したいと思う」「自分が描いたもので笑顔にできたことが嬉しい。新聞記事を読んだ時に、「絵を描く時に参考にしたい」という言葉があった。喜んでもらいたい一心で制作していたため、生徒にとって絵を描く時の参考になっていたことに驚いた。手本となれるよう、今

後はデッサン力も極めていきたい。」

### 3.4.6 STEAM 教育への意識

「STEAM 教育を意識した黒板絵を構想した感想をお書きください」という問いについては以下のようなものがあった。

「普段は勉強の道具のひとつにすぎないものが興味をひくものになっていたら、心が動き、豊かな学校生活に繋がるのではないかと思います。今回このようなかたちで間接的にはありますが児童と関わることができて嬉しかったです」「ただ絵を見て気に入ったり、おもしろがったりするだけでなく、作品から得た情報をもとに子ども自身でいるようなアイデア・ストーリーを膨らませることができるような作品にしようと意識した。この作品を生み出すまで色々迷走したが、子どもたちのために良いものができたのではないと思う」「子どもたちが黒板アートを通じて、異年齢とのかかわりや芸術を通じた交流を図れたことはとても良い経験につながると考えます。芸術を通じて、物事の様々な見方・考え方を捉える力を養ってほしいと思います」「美術の1つとして黒板アートがあることや、チョークも使い方によって表現が広がることなどを知り、感性を磨くことができれば、学びや生活の色どりとなると感じている。紙に絵の具で描くことだけがアートではないことなど、広い視野を持ち、それぞれが個性を表現できる教育を目指していきたい。」

STEAM 教育では、Science (科学), Technology (技術), Engineering (工学), Mathematics (数学) といった1つの解決策を目指す傾向 (収束思考: convergent thinking) に、Art (芸術) という個人個人で異なる解決策を模索する傾向 (拡散思考: divergent thinking) が加わることで多面的見方が促され、新しい解決策を生み出せる思考の育成が促されるとされているが (Sousa & Pilecki, 2013), それを意識しながら制作することで、大学生・大学院生は今後の教育活動に向けた STEAM 教育への意識を高めていくことがうかがえる。

### 3.4.7 地域や学校への貢献

今回の黒板アート制作を通じた地域の学校への貢献については、「地域を盛り上げる、力になれることは嬉しいですし、美術面での学びも多く得られるような今回の企画はなかなかないため、すごく良い時間を過ごさせてくださいました」「絵を通して子どもたちや先生方、地域の方と交流することができたのは良かったし、作品を送ることで、久万高原町の子どもたちに貢献できたと思う」「地域に住む人々に日常を超えるワクワクを提供できる素敵な活動だと感じた」「このような地域に関わる活動は継続的に取り組みたい」というように地域貢献への意欲を生んでいる。

また実際に、「美川上黒岩遺跡で灯される絵灯籠の制作

イベントに、アシスタントとして参加させていただいた。イベントを見るために久万高原町を訪れる人など地域おこしにつながると感じた。また制作したのを見るために地域の人が集まり、交流できるコミュニティにもなると感じた」とあるように、他の地域貢献への連関も生んでいることがわかる。

### 3.4.8 今後へのアイデア

最後に、「今後もこの活動をする場合、アイデアやご意見、ご感想をお聞かせください」と改善点についても尋ねている。

「今回とても貴重な体験をさせていただいたので、もっとたくさんの人に参加してほしいなあと思いました」「素晴らしい経験だったので、もっとこの活動をたくさんの人に拡散したほうがいいと思いました」「今回の参加者にも高校生の方がいらっしゃいましたが、もっと近隣の高校に声をかけてたくさんの人が体験できるといいなあと…!」といったような対象の拡大と広報についての意見があった。

また、「予め自分たちがどの学年の児童、生徒に向けて描くかということが分かっていたら嬉しいです」「久万高原町の学校では、少人数クラスも多く、ひとりひとり児童・生徒の意見を取り入れやすい。テーマやモチーフを決めてもらい、新学期にどんな黒板アートになっているか答え合わせができるような仕掛けがあると面白いと感じた」というように、事前準備に向けた情報共有についても挙げられていた。今後の改善に向け検討が求められるであろう。

### 3.4.9 制作した学生・大学院生に対する成果まとめ

以上見てきたように、黒板アート事業は、制作した大学生・大学院生においても、表現者としての成長や意識・意欲の向上のみでなく、子ども理解の促進、教室掲示・学校掲示の重要性の認識、小規模校・山間校の理解促進、防災教育的視点の芽生え、STEAM 教育への意識向上、地域貢献への意欲向上や連関といった、地域の次世代を育成する教員になる者としての多くの学びをもたらしていることがわかる。

## 4. 成果のまとめと課題、そして今後の展望

本研究では、黒板アート事業での活動を報告するとともに、児童生徒及び制作した大学生・大学院生へのアンケートから成果を検討してきた。ここまで見てきたように多くの成果が挙げられるが、特に以下の成果が強調できるであろう。

#### 4.1 鑑賞した児童生徒への成果

- ①エンパワメントと学校生活への意欲向上：黒板アートの鑑賞を通じて「元気がもたらえた」「挑戦したい」といった前向きな気持ちが湧き、2学期からの学校生活や学習、清掃活動など、様々な活動に対する意欲が高まった。
- ②知識・技能・態度の変化：作品に描かれた花の名前を知ったり、芸術的な技法を認識したりするなど、新たな知識や技能を獲得した。また、「今までと違う見方で物事を見てみたい」といった視点の拡大や、探究意欲の向上につながった。これらは、STEAM教育で育成が期待される収束思考と拡散思考による多角的見方の拡大と捉えることができ（Sousa & Pilecki, 2013）、黒板アートを鑑賞した児童生徒にSTEAM教育としての成果がもたらされていることがうかがえる。
- ③作品メッセージの伝播：作品に込められた「個性」や「友情」、「夢や目標」といったメッセージを正確に受け取り、自分自身の行動や考え方を見つめ直すきっかけとなった。
- ④芸術への親しみと鑑賞能力の向上：黒板アートという身近な素材で制作された超絶な作品を目の当たりにすることで、芸術に親しみを感じ、作品の内容や技法をじっくりと観察し、評価する鑑賞能力が育まれた。

#### 4.2 制作した大学生・大学院生への成果

- ①表現者としての成長と意識向上：自己完結的な創作から「誰かのために描く作品」へと意識が変わり、対象を考慮したテーマ設定や構図の重要性を認識した。また、黒板やチョークの可能性に気づき、技術的な自信と意欲を高めることができた。
- ②教員になる者としての学び：子どもたちの反応から子ども理解が促進され、教室掲示や学校掲示の重要性、STEAM教育への意識の向上、さらには小規模校や山間校の現状、防災教育的視点など、将来の教員としての多様な学びを得た。
- ③制作へのモチベーション向上：児童生徒が喜ぶ姿や、作品を肯定的に受け止める反応を通じて、達成感や充実感を感じ、今後も絵を通して喜びを提供したいという強いモチベーションが生まれた。
- ④地域貢献への意欲と連関：地域の子どもたちや学校に貢献できたことに喜びを感じ、今後も継続的に地域と関わる活動に取り組みたいという意欲が高まった。他の地域貢献イベントへの参加にもつながった。

以上が示すように、今回、STEAM教育を基盤とした地域教育の創生、並びに次世代を担う人材の発掘・育成を目指す、次世代人材育成拠点の一員として、黒板アートの教育的意義に注目し事業を展開したが、児童生徒、大学生・

大学院生ともに様々な成果をもたらすことができたと考えている。

大学生・大学院生への成果からも、地域と連携できる教員、地域志向を持った教員、地域とともにある教員を育成できる、地域未来教育カリキュラムとして十分な可能性を持つ事業であることが指摘できる。

#### 4.3 改善を目指す課題

本研究では、児童生徒・大学生大学院生へのアンケートの分析により事業の成果を検討した。しかし、本事業に関わっている社会人作家、当該校の教職員、保護者等の声を聞くことは今後の課題である。

特に、保護者は、子どもによる伝聞やメディアの情報でしか本事業を知る機会がない。また、作品を制作した大学生・大学院生や社会人も、子どもたちが黒板アートを鑑賞している生の様子を見る機会がない。

保護者が黒板アートを生で鑑賞する体験、そして作家が鑑賞する子どもたちの生の様子を見る体験は、制作意欲や達成感につながる多面的な効果をもたらすことが期待できるため、これを可能にする方法を検討する必要がある。

他に事業運営上の課題として、学校が期待する黒板数に対して、制作を担う作家（学生や社会人）をいかに集めるかという点が挙げられる。実際、台風接近や体調不良により直前に欠席する事態も発生した。打ち合わせにより、その穴を埋めることができたものの、公開当日に自分の学級だけ絵が描かれていないという事態は、何としても回避する必要がある。タイトなスケジュールで参加している作家の急な予定変更に対応するため、今後は複数名で1枚の黒板を制作するといった方法も検討していく。

また、学校の対応可能な日と制作したい日程の調整にも課題が残る。近年、働き方改革の影響で8月中旬や土日が閉庁日となり作業が困難になり、社会人作家の中には、日程の都合で参加できない者もいた。閉庁日に管理職の好意で教室の開閉をしてもらい、ようやく作業ができたということもあったが、これは恒常的な解決策とは言えず、教職員の献身的な行為に甘え続けるわけにはいかない。

さらに、今回の台風接近では、学生を引率する際の安全確保（保険や実施の有無を判断する基準）について判断に苦慮するという課題も顕在化した。これらの運営上の課題に対応するためにも、本事業を教育学部等の授業の中で行うことが望ましいと考えられる。これにより、安全管理の体制を整えつつ、大学生・大学院生を一定数確保することにもつながる。

#### 4.4 今後の展望

本研究の結果、本事業は、児童生徒、制作者である大学生・大学院生双方にとって非常に有意義な活動であったと言える。

近年、教育現場では「チーム学校」という言葉に象徴されるように、協働的な取り組みが重視されている。しかし、今回のように学生が一人の力で限られた時間の中で作品を仕上げた経験は、協働を支える個の力を育む上で極めて重要となる。今回、学生は不安や困難に立ち向かい、乗り越えることで大きな喜びと感動を得た。その原動力は、児童生徒が作品を見て喜ぶ姿を想像することであり、これは「人のために働くことの尊さ」を肌で感じたものと考えられる。このような体験の積み重ねは、教育に対する強い意識と責任、そしてそれを支える教育的愛情を育む事につながるものと期待される。つまり、本活動は、地域とともにある教員を育成する上で有効な地域未来教育カリキュラムになりうることを示されたのではないだろうか。前述の通り、解決すべき様々な課題があるため、今後の更なる研究を通して、その有効性、実効性を高めていく必要がある。

また、児童生徒からの「驚きと感動」や「作者への感謝」といった多くの声、そして制作した学生からの「今後、実際に子どもたちと交流したり、一緒に作品を作りたい」「今後もぜひ続いてほしい活動だ」といった言葉は、本事業の価値向上に向けた新たな可能性を示唆している。これらのフィードバックを活かし、交流や共同制作といった新たな取り組みを加えながら事業を継続していくことで、本事業はさらに価値ある活動になっていくと考えられる。

## 参考文献

- 善通寺市観光協会善通寺市まちなか黑板アート事業 (2022) <https://www.kukainavi.com/machinaka-art/> (2025年9月30日閲覧)
- 一般社団法人まちづくり木更津 (2022) 木更津駅アートジャックプロジェクト <https://www.kisarazu-machizukuri.com/information/%e9%bb%92%e6%9d%bf%e3%82%a2%e3%83%a9%e3%83%88%e3%81%a7%e6%9d%a8%e6%9b%b4%e6%b4%a5%e9%a7%83%e3%82%a2%e5%bc%a9%e3%82%8d%e3%81%be%e3%81%9f%ef%bc%81%ef%bc%81/> (2025年9月30日閲覧)
- 竹内亮史, 高橋克典, 川口翔平 (2020) 「子どもの没頭を生み出す単元デザインの一考察: オーセンティックな単元に向けた3つの視点」, 『川崎市総合教育センター研究紀要』 34, 153-160.
- 三澤一実 (2015) 「造形批評力獲得のためのプログラム開発: 「旅するムサビ」の取り組みと「造形と批評」」, 『日本美術教育研究論集』 49, 155-162.
- 荒木恵信 (2019) 「日本画を学ぶ学生の「黑板アート」制作記録」, 『金沢美術工芸大学紀要』 63, 2-7.
- 愛媛大学次世代人材育成拠点ウェブサイト <https://www.ngeneration.ehime-u.ac.jp> (2025年9月30日閲覧)
- 愛媛大学 (2024) 愛媛大学ガイドブック2025. <https://www.ehime-u.ac.jp/ebook/guidebook2025/index.html#page=35> (2025年11月30日閲覧)

- 愛媛大学教育学部ウェブサイト <https://ed.ehime-u.ac.jp/edhp/kyouiku/> (2025年11月30日閲覧)
- 愛媛大学教育学部ウェブサイト <https://sample-tl-et.my.canva.site> (2025年11月30日閲覧)
- 高橋平徳, 日野克博, 徳田義実, 二宮啓, 高木啓吾 (2023) 「with コロナ時代における学生宿泊型教育体験活動の試みー 2021年度, 2022年度「リーダー村」での活動よりー」, 『大学教育実践ジャーナル』 22, 91-101.
- D. A. Sousa, T. Pilecki (2013) “From STEM To STEAM: Using Brain-Compatible Strategies to Integrate the Arts”. Corwin. (胸組虎胤訳 (2017) 『AI時代を生きる子供のためのSTEAM教育』, 幻冬舎.)